第18回国際日本文学研究集会研究発表（1994.11.10）

『太平記』の死の様相と論理

THE MODALITY AND LOGIC OF DEATH IN THE *TAIHEIKI*

崔　文　正*

The confrontation between "the hero and religion" is a problem in the study of military tales. Employing the same method that I used in another article, "The Modality and Logic of Death in the *Heike Monogatari,*" I will analyze 'death' in the *Taiheiki* and the characteristics of its reception and transformation. After dividing all examples of death into two categories, deaths on the battlefield and non-battlefield deaths, I will further classify the former into deaths in vanguard attacks, common death in battle, annihilation, deaths in lone counterattacks, and suicides by generals and samurai, etc. and the latter into deaths by natural causes, executions, and suicides. Examples of each of these types of death will provide material for investigating the special features of the hour of death. As a result we will find confirmation in the *Taiheiki* as we did in the *Heike Mnogatari* of a difference in outlook with

*CHOI Moon Jung　韓国外国語大学校大学院日本語科卒業。日本女子大学大学院日本文学専攻博士前期課程を経て、現在同大学院博士後期課程に在学中。日本中世軍記文学（『平家物語』『太平記』）が、主要な研究テーマ。論文に「平家物語の死の様相と論理」（軍記・語り物研究会刊『軍記と語り物』第30号）などがある。

respect to death on the battlefield and non-battlefield death when our criterion is emphasis on the hour of death and the space in which death occurs. Heroic death in battle is naturally praised, but off the battlefield seeing the light of Buddhist truth at the moment of death is demanded all the more. However, there is a difference between these two military tales. In the *Heike Monogatari* the salvation of the defeated is preached whereas in the *Taiheiki* there is such an emphasis on heroism on the battlefield that the deep-seated grudge of the supporters of the Southern Court gains particular prominence and this provides a structure which connects to later tales of vindictive spirits. Death is candidly depicted off the battlefield as well in a wretched environment where seeing the light of Buddhist truth at the moment of death is impossible and [the presence of] vindictive spirits is suggested. One can sense the contrivance used to express the legitimacy of the imperial line of the Southern Court in scenes in the lack of scenes in which its adherents are annihilated in some grotesquely one-sided battle and in the stereotyped characteristics of those scenes which lack narration of their deaths from some divine curse.

Discrimination can also be seen in the depiction of damage to private citizens and their property. Although there is no comment on damage to laymen and their property, plunder of and arson against shrines and temples is severely criticized and considered an omen of defeat.

In the description of death examined above in the *Taiheiki* one can catch a glimpse of its authors' purposes from the stereotypes and distinctions employed. That is, while recognizing the

legitimacy of the world of the samurai the author seeks to realize the continuation of the "imperial rule and Buddhist rule," which he believed comprised the order and structure of the state, by making the samurai order, the new political power-holder which fed on the rivalry of local barons, acknowledge the vindictive spirits of the legitimate imperial line and by emphasizing the role of the Buddhist authorities in pacifying them.

I. 序

生と死で勝負が決まる武力の闘争を題材とした軍記物語において、死の描写は必然的な事であろうが、特に『太平記』は、その死が描かれるために登場する人物が殆どであるといってよい程、死の描写が内容の大分をなしている。記事量だけでなく、仏教文学の範囲内にも入る軍記物語であるからこそ、死は重要な問題と関わっているといえよう。死に様が重視される風土の中で浄土教の文化は栄えていたが、戦乱と共に始まった武勇と宗教との対決、即ち、死の瞬間要求される往生への道の臨終正念と、武勇の死に様という対決は先鋭な対立を余儀なくされた。そのような背景で怨霊と鎮魂の問題は軍記物語において大きな比重を占め、成立にも関わる重要なテーマとなったものと考えられる。

軍記物語研究において課題となっている武勇と宗教の対決の問題を巡って[1)]拙稿「『平家物語』の死の様相と論理」[2)]でその解明を試みた結果、戦場死では最期の武勇と結束の精神、非戦場では欣求浄土的な臨終正念と死後供養が丹念に描かれて、それで死が美化され、特に建礼門院の供養と往生で平家一門の往生が象徴される構造であることが分かってきた。本稿では『平家物語』で試みたのと同じ方法で『太平記』の死を分析し、その受容と変容の性格を明確にするとともに、死の描写の意味と特質を探ることによって、軍記物語の『太平記』の本質に迫っていくことを狙っている。

『太平記』の死の描写について、永積安明氏は「退廃の一歩手前での客観主

義的な描写とする外はあるまい」[3]とし、山下宏明氏は「『平家物語』の場合は、一人一人の死が全体の物語の中でしかるべき位置があって、一人一人の人間の死に意味が与えられている。『太平記』はそうではない」[4]と指摘された中沢新一氏の見解を引用された上、「時には狂言の世界にも通う喜劇性をもたらす」[5]とも評価され、『太平記』の死の描写には構造に関わるような意味が込められているとは見ないのが現在の定説となっている。ところが私が『太平記』の死を分析した結果、『太平記』には『平家物語』よりも死に対する認識が鮮明に打ち出されていて、「情況的に無意味でしかない」[6]と指摘されるような死の叙述の中には、緻密な構成意識が込められている事が分かってきた。即ち、後生善所のためには欣求浄土的な最期の一念が必要だという前提の上で、戦場では武勇、非戦場では最期の一念が要求されていて、場によって規定される死の論理は『平家物語』だけでなく『太平記』にも継承されている。しかし、具体的な死の叙述においては、戦場では武勇が強調された悽惨で執念深い死の有様が、非戦場でも武士の世がもたらした極限的な惨めな状況下で臨終正念の暇も持ちえない死の模様が叙述されて、皆往生が遂げられない事を感じさせる点に『太平記』の独自性が見られる。さらにまた南朝宮方の軍勢に関しては、敵の戦術に巻き込まれて碌な戦いもできずに味方の軍勢を多量に失ってしまう壊滅的戦死とか、神罰によるものと規定される死がまったく見られない点も注目される。代わって後醍醐天皇とその武将達の最期の怨念が浮き彫りにされ、それが怨霊譚に繋がっていく構造となっている。以上のような『太平記』の死の叙述、その類型性と差別性等の意味と背景を考察する事によって、『太平記』の死の叙述に如何なる意図が込められているかを探ってみることにする。尚、考察の対象とする『太平記』本文は、慶長八年古活字本（流布本）とし、引用文と巻名、章段名、頁数は、新潮日本古典集成に拠ることにする。

Ⅱ．戦場死の様相と論理

数え切れない『太平記』の死の叙述において、まず戦場で死を遂げていく模

様が、戦闘の状況によって幾分パターン化されているものがある。それを便宜上、私なりに定義して名称をつけてみると、①一番乗りで先懸けていく先陣攻撃中に迎える先陣攻撃死、②味方の敗走中、敵に後ろを見せるのを恥と思って、敵の軍勢に反撃して死んでいく単独反撃死、③接戦中、これといった特徴なしに敵に殺されてしまう白兵死、④敵の戦術とか大力に巻き込まれて、碌な戦いもできずに味方の軍勢を多量に失ってしまう壊滅的戦死、⑤味方の破滅を迎えて、自ら死を遂げる武将と侍の自害等に分けられる。戦場での膨大な死を分析していく方法として、このような分類にしたがって考察していくことにする。

戦場死の中、まず死亡者の臨終時の宗教的行為が叙述されていない場合から取りあげて考察してみる。

先陣攻撃死は、失敗の危険性が非常に多く、それで初めから死を覚悟して出発するのが普通である。『平家物語』では、佐々木と梶原（巻九　宇治川先陣）等が先陣争いで勝ちを収める話が明るい雰囲気の中で描かれている。先陣攻撃で犬死にした河原兄弟に対しても「あつぱれ剛の者」（巻九　二度之懸）云々と称えて、その死を惜しんでいる。これに対し『太平記』では先陣を担当した武士達がその場で凄惨に殺害されてしまう状況が主に描かれていて、その武勇を尊んだり、死を惜しむような表現も一切ないのが特徴である。

『太平記』の先陣攻撃の様相をその性格上、もっと細かく分類すると、先陣格闘、矢合戦、夜討ちに分けられる。当時、集団戦の前段として両方から武勇の覚えのある者が出て、武術を競う場合があるが、その時、大体滅私奉公を証明して恩賞を確保するための名乗りがあり、続いて強弓の力技を誇示するか、先陣格闘に挑むようになる。しかし先陣格闘の結果は、「設楽は力まさりなれば、上に成つて斉藤が首を掻く。斉藤は心早き者なりければ、挙げざまに設楽を三刀刺す。いづれも死して後までも互ひに引つ組んだる手を離さず、ともに刀を突き立てて同じ枕にこそ臥したりけれ。」（巻九　六波羅攻めの事）とか、「備後国の住人、江田源八泰氏」と「杉本の山神大夫定範といひける悪僧」の二人が「引つ組みながら、数千丈高き小篠原を、上になり下になりころびける

が、中程より別々に成つて、両方の谷の底へぞ落ちたりける。」（巻十七　山攻めの事付日吉神託の事）等と、いずれも相討ちの悽惨な死に様で終結する。このような捗々しい格闘ではなく、集団戦で一番乗りで戦おうと敵に走り懸かって殺された例としては、「「敵は少勢なりけるぞ。…つづけや者ども」と言ふままに、…敵のうづ巻いてひかへたる真中へかけ入」（巻二　師賢登山の事付唐崎浜合戦の事）った海東左近将監が遂に「喉ぶえを突かれて、馬より真倒に落ち」て死んだ例等、数え切れないが[7]、突然現れた人物の登場と死が一つの文章の中で完結するのが普通である。

矢合戦では、強弓の技で勝利を収める成功譚も見られるが、その場合も勝利者側の力技よりは、死も怖れずに対抗して即座に殺されてしまう模様が強調されている。即ち、勝利者側の描写としては、「本間孫四郎・相馬四郎左衛門とて、十万騎が中よりすぐり出だされたる強弓の手だれあり。」（巻十七　山攻めの事付日吉神託の事）と紹介して、「よのつねの弓に立て並べたりければ、今二尺余りほこ長にて、…普通の弓四、五人張りあはせたる程なるを、…」と弓矢の凄さが叙述されている。ところが続いてこの矢で殺されてしまう人の描写としては、「長八尺ばかりなる男の一荒れ荒れたるが、鎖の上に黒皮の鎧を着、」等と長々と装束描写を施してから、「少しもためらふ気色なく小跳りして登るありさまは、摩醯修羅王・夜叉・羅刹の怒れる姿に異ならず」とその武勇をもっと誇張するかと思うと、遂に「矢さき三寸ばかり血潮に染みて出だしたりければ、鬼か神と見えつる熊野人、持ちける鉞をうち捨てて、小篠の上にどう臥す」と、あっけない最期が記される。さらにまたこれに対抗して出た人がいて、「先の男に一かさ増して、仁王を作り損じたる如くなる武者の、眼さかさまに裂け鬚左右へ分かれたるが、（装束描写省略）…「遠矢な射そ、矢だうなに」と言ふままに、鎧づきして上りける所を、…鏃の見ゆるばかりに射込みたりければ、あつと言ふ声とともに倒れて、やにはに二人死ににけり。」というように、凄い男がやにわに殺されてしまう模様を活写することによって、強弓の実力を現わしている。類例としては、荒尾兄弟を即死させた足助次郎重範の例

（巻三　笠置軍の事付陶山・小見山夜討の事）、赤松勢の田中兄弟・頓宮父子を死に追いやった安芸前司（巻八　四月三日合戦の事付妻鹿孫三郎勇力の事）の例もあり、同じ性格が窺える。一方、強弓で名高かった本間孫四郎の場合も、遂に生け捕られ、「度々の振舞ひにくければとて、六条河原へ引き出だして首を刎ねられ」（巻十七　還幸供奉の人々禁殺せらるる事）てしまう。

夜討でも成功を収める場面があって、北条軍の陶山の一族若党五十余人による笠置城陥落（巻三　笠置軍の事付陶山・小見山夜討の事）等の例があるが、功名譚として仕上げられていない。石生彦三郎による熊山夜討（巻十六　児島三郎熊山に旗を挙ぐる事付船坂合戦の事）、八幡山の攻防（巻三十一　八幡合戦の事付官軍夜討の事）等の例は、結局成功に至らず、功績が目立たない。

では、先陣攻撃がこのようにあまり賛美されない理由について考察してみたい。まずこれについての認識が示されていると思われる文章を引用する。

①兵は仁義の勇者、血気の勇者とて二つあり。血気の勇者と申すは、合戦に臨むごとに勇み進んで臂を張り、強きを破り堅きを砕く事、鬼のごとく忿神のごとくすみやかなり。しかれどもこの人もし敵のために利を以つて含め、御方の勢を失ふ日は、逃るにたよりあれば、あるいは降人に成つて恥を忘れ、あるいは心もおこらぬ世を背く。かくのごとくなるはすなはちこれ血気の勇者なり。仁義の勇者と申すは、かならずしも人と先を争ひ、敵を見て勇むに高声・多言にして、勢ひを振るひ臂を張らざれども、一度約をなして頼まれぬる後は、二心を存ぜず心変ぜずして大節に臨み志を奪はれず、傾くところに命を軽んず。（巻二十九　師直以下誅せらるる事付仁義血気勇者の事）

捗々しい功績を狙う先陣攻撃、高声・多言の名乗りの武士をただ血気の勇者と見て、いくら力技に長じていても状況によってすぐ離反してしまうような武士は認めないという認識が示されているが、この点と先陣攻撃の武士が賞賛されていない点に関係があるのではないかと見受けられる。離反がそれ程激しかったこの時代の状況が反映された認識であるとも思われるが、そのような背景で、

悽惨な姿で死んでいく模様を丹念に描くことにより、武士としての名分を現し、悽惨な死が義であり、花であることを感じさせる叙述となったものと考えられる。

次に目を引くのは、幕府側から出された抜け駆け禁止の措置である。

②「…分捕りをもしたらんずる者をば、凡下ならば侍になし、御家人ならばぢきに恩賞を申し与ふべし。さればとてひとり功名せんとて抜懸けすべからず。…」　（巻十七　山攻めの事付日吉神託の事）

③「抜懸けの輩においては、罪科たるべきの由をぞふれられける。」

（巻六　赤坂合戦の事付人見・本間抜懸けの事）

『平家物語』では最高に賞賛されていた先陣攻撃、抜け駆けが『太平記』に至っては禁止されるようになる。それは集団戦を基本としていたこの時代の合戦で、指揮体系を無視した抜け懸けの行為は、かえって逆効果をもたらすから禁止されていたものと判断される。それで後半になるにつれて、個人の活躍よりは指揮体系が重視されるような形で集団戦がよく行われるようになる[8)]。

しかしここで例外が発見できる。抜け懸け禁止の措置を違反してまで先陣争いをして、何の功績も達成できずに死んでいった人見と本間父子の事を、叙述者は、「惜しいかな、…義を知って命を思ふ事、時とともに消息す」（上同）云々と述べて称えている。この場合外の例と違うのは、彼らの先陣が功名をねらっての事ではなかったということである。即ち、七十三才の人見は「武運の傾かんを見んも、老後の恨み、臨終のさはりとも成りぬべければ、明日の合戦に先懸けして、一番に討死して、その名を末代に遺さんと存ずるなり」と、傾いていく北条軍に離反することなく、身を献じたのである。一方彼らの首を拾ってきた善知識の僧は、「命をば相模殿に献り、恩賞をば子孫の栄華にのこさんと、おぼしめしけるゆゑにこそ、人より先に討死をばしたまふらめ。」と彼らの抜け駆けを功名を狙っての事と解釈して、本間資貞の息子資忠に「父子ともに討死したまひなば、たれかその跡を継ぎ、たれかその恩賞をかうむるべき。…暫く止まらせたまへ」と死を制止する。しかし資忠は葬儀の時、逆修をして敵陣

に走りかかり「ついに父が討たれしその跡にて、太刀を口にくはへてうつぷしに倒れて、」死してしまう。ただの犬死と評価されるしかないこの死が賞賛されるのは、彼らの抜け駆けが功名を狙っての事ではなかったのと、傾いていく主君に離反することなく、身を献ずる義理の精神が高く評価されたものと考えられる。このように先陣攻撃というのは功名を狙って争う事が一般的であるが、当時は当然な事であったせいか、兵士の場合はそのような事情に一々触れる事もない。ただ死を描いて、抜け駆けを奨励することはなかったものと考えられる。

一方、一族を率いて先懸けしたが、戦わずに落ちて命拾いした高橋又四郎と小早川に対しては、始めから「抜懸けして、ひとり高名に備へんとや思ひけん」等とからかう言葉が付いており、「白昼に京都に逃げ上」ったことに対して、「懸けもえぬ高橋落ちて行く水に憂き名を流す小早川かな」（巻三　笠置軍の事付陶山・小見山夜討の事）等と揶揄する落書を紹介し、「見苦しかりし有様なり」と否定的な評価を下している。しかし武将が先陣争いで犬死にした場合は、大層否定的に捉えられている。先陣攻撃中に射殺され、足利に離反の好機を与える等、味方の敗北を決定的なものにした北条軍の大将名越尾張守に対しては、「寄手の大将名越尾張守をば、範家がただ一矢に射殺したるぞ。」（巻九　足利殿御上洛の事）と雑兵の手に殺されたと名乗られるような恥を叙述している。このように中小兵士の役割、死に方と武将のそれとははっきり区別されているような印象を受けるが、そのような性格は、白兵死、単独反撃死の分析からも窺える。

接戦の末につい敵の手に殺されてしまう白兵死には、まず戦闘毎に出てくる無名兵士の死がある。「二百騎・三百騎・千騎・二千騎兵を添へて、相戦ふ事三十余度に成りしかば、義貞の兵三百余騎討たれ、鎌倉勢五百余騎討死して」（巻十　86頁）等という死の叙述は枚挙に暇がない程である。その他にその時代の兵士の特別な役割として、味方が破滅に向かった最後の時に「防き矢」を射て僅かな時間を稼ぎ、武将と侍を自害に至らせる。例えば、北条越後守仲時

が敗北に際して、「もしあとより追つ懸けたてまつる事もあらば、防き矢つかまつれ。」（巻九　越後守仲時以下自害の事）との命令を下して、主従が敗亡の凄絶な儀式の如き集団自害に至っている。一般兵士の武将の盾としての役割は、最期の時だけでなく、敗走の時も果たされるようになる。例えば、「内野の大勢いよいよ重なって、新田左中将兄弟の勢を、十重・二十重に取り巻いて、をめき叫んで　攻め戦う。されども義貞の兵ども、元来機変磬控・百鍛千錬して、おのれが物とえたる所なれば、一挙に百重の囲みを解いて、左副・右衛一人も討たれず。返し合はせ返し合はせ戦ひて、また山へ引き返す。」（巻十七　京都両度軍の事）という叙述からも把握できる。これで武将はたやすく死に至ることなく戦闘が続けられるが、その代わり武将が本望を遂げずに、雑兵の手に懸かって殺されるのは大変な恥で、怨み、失策に通じていた[9)]。特に細川相模守の死においては、武将の死についての作者の認識がはっきり示されている。即ち細川相模守清氏が「刺されて弱れば刎ね返して、押さへて首をぞ取」られたことについて、「その身は深田の泥の土にまみれて、首は敵の鋒にあり。ただ元暦のいにしへ、木曽義仲が粟津の原にて討たれ、暦応二年の秋の始め、新田左中将義貞の足羽の畷にて討たれたりし二人の体に異ならず。」（巻三十八　細川相模守討死の事付西長尾軍の事）と、『平家物語』では否定的に捉えられていなかった木曽義仲の例まで取りあげて、武将が雑兵の手に殺されることへの恥に触れ、「今年天下すでに同時に乱れて、宮方眉を開きぬと見えけるが、程無く国々静まりけるも、天運のいまだ至らぬところとはいひながら、まづは細川相模守が楚忽の軍して、言う甲斐無く討死をせしゆゑなり。」（巻三十八　和田・楠、箕浦次郎左衛門と軍の事）と宮方が再起できなかった責任を負わせ、「さればいにしへも今も、敵を滅ぼし国を奪ふ事、ただ猛く勇めるのみにあらず。かねては謀を回らし智慮を先とするにあり。」（巻三十八太元軍の事）と、武将には武勇に先んじて謀と智慮が大事であると明確に断言している。このような論理は『太平記』の終末部で離反勢の武将を皆受け入れて、和平に至るという歴史の事実を弁護するような効果もあろうが、これで死も恐れない精神を

称え、死を催促するような文句の「死を軽んじ名を重んずる者をこそ人とは申せ。たれたれもここにて討死して、名を子孫に残さんと思ひ定められ候へ。」（巻十六　46頁）とか、「逆巻く波に巻き入れられて、馬人ともに見えず、水の底に沈んで失せにけり。その身はいたづらに溺れて、尸は急流の底に漂ふといへども、その名は永くとどまつて、武を九泉の先に輝かす。」（巻十九　292頁）、「運の傾くくせなれども、臆病神の付きたる人ほど見苦しきものは無し。」（巻二十九　358頁）等という表現は、一般兵士だけに当てはまる言葉で、武将には関係ない論理であるといえよう。

このような性格からいえば、味方の敗走中、敵に後ろを見せるのを恥と思って、敵の軍勢に反撃して死んでいく単独反撃死も一般兵士だけの役割といえよう。即ち、「「きたなき人々のふるまひかな。十膳の君に憑まれまゐらせて、武家を敵に受くる程の者どもが、敵大勢なればとて、戦はで逃ぐるやうやある。いつのために惜しむべき命ぞ」とて、向ふ敵に走り懸かり、大はだぬぎに成って戦ひけるが、矢種を射尽し、太刀を打ち折りければ、父子二人、ならびに郎等十三人、おのおの腹かき切って、同じ枕に伏して死ににけり」（巻三　130頁）等という死に方は、義理の精神からのことであるが、謀と智慮を先としなければならない武将が担当すべき死ではないはずである。しかし北条軍団の滅亡の場合は、兵士だけでなく、武将も単独反撃に立ち向かって死んでいく事例があり、それも賞賛的に描かれている。大仏貞直は「むねとの郎従三十余人」が切腹したのに対し、「日本一の不覚の者どもの行跡かな。千騎が一騎に成るまでも、敵を亡ぼして名を後代に残すこそ、勇士の本意とするところなれ。いでさらば最後の一合戦快うして、兵の義をすすめん」とて、二百余騎の兵を相従へ、…雲霞のごとくにひかへたる真中へ懸け入り、一人も残らず討死して尸を戦場の土にぞ残しける。」（巻十　大仏貞直ならびに金沢貞将討死の事）とある。金沢貞将は北条滅亡の瞬間、両探題職に居ゐらるべき御教書」を受け取って、その御教書の裏に　「「わが百年の命を捨てて公が一日の恩に報ず」と大文字に書きて、これを鎧の引合はせに入れて、大勢の中へ懸け入り、つひに討死したま

ひければ、当家も他家もおしなべて、感ぜぬ者も無かりけり。」（上同）とその反撃死の精神を賞賛的に描いている。これは北条軍団の滅亡に焦点を絞った拙稿「『太平記』の死の諸相」[10] でも論じたように、『太平記』に見る北条軍団の滅びは、神仏に背いた結果、もたらされたもので、初めから「滅ぶべきだ」という冷たい認識が示されている反面、死においては美しく滅んでいく姿を描こうとする意図が背景にあるものと見られる。

このような特徴は、味方の破滅を迎えて自ら死を遂げる諸武将の死に様をまとめて比較した場合にもっと明らかになる。詳しくは前述の拙稿で触れているわけで、ここでは略述するが、宮方の方は死後までの敵討ちの精神を吐露する恨みの多い死に方であったのに対し、北条側の方は恨みは殆ど見られず、主従間の義理と最後の武勇だけが浮き彫りにされた形ではっきりと分けられていること、そしてそのような特徴は怨霊化される宮方と、怨霊化されない北条軍団というような類型にもつながっていく問題となっている。

このような類型的な特徴は、壊滅的な死の様相においてもはっきりと現れている。まず壊滅的戦死の例を提示する。

①「寄手の百八十万騎、さしもけはしき今路・古道・音無滝・白鳥・三石・大嶽より人なだれをつかせてぞ逃げたりける。谷深うして、行くさきつまりたる所なれば、人馬いやが上に落ち重なつて死にけるありさまは、伝へ聞く治承のいにしへ、平家十万余騎の兵、木曾が夜討ちに懸け立てられて、くりからが谷に埋もれけるも、これには過ぎじと覚えたり。」

（巻十七　山攻めの事付日吉神託の事）

このような壊滅的な死は、北条軍団と足利軍団だけが合わせられるだけで、宮方の方が壊滅的戦死に合うような叙述は出ていない。壊滅的戦死の事例としては、楠正成の前代未聞の新戦術により北条軍団が惨敗される場面が一番多く、巻三の赤坂城軍と巻七の千剣破の城軍に大体集約されている。矢と剣、刀だけでなく、二重の屏（143頁）、熱湯（144頁）、大木（302頁）、大石（298頁、304頁）、火（307頁）、藁人形（304頁）まで散々使いこなして、奇略で（140頁、

254頁）寄手を翻弄、惨敗させている。楠以外の場合は、「本性房といふ大力の律僧」により、「東西の坂に人なだれを築いて、…さしも深き谷二つ、死人にてこそうめた」（巻三　笠置軍の事付須山・小見山夜討の事）とある叙述、「大手の寄手千余騎、谷底へ皆まくり落されて、おのれが太刀・長刀に貫かれて命をおとす者その数を知らず」（巻七　船上合戦の事）、「城の麓より武庫川の西のはたまで道三里が間、人馬いやが上に重なり死んで、行く人路を去り敢へず。」（巻八　摩耶合戦の事付酒部・瀬川合戦の事）等の場面が宮方により北条軍団が壊滅される事例である。その他、足利軍団が宮方により壊滅される場面としては、足利尊氏軍（巻十七　山攻めの事付日吉神託の事　105頁、120頁）、足利尾張守高経軍（巻二十二　畑六郎左衛門が事　435頁）、細川の兵三千余人（巻三十一　八幡合戦の事付官軍夜討の事　467頁）、義詮軍（巻三十二　神南合戦の事　64頁）等の例が出ている。

以上の戦場死では、武勇が思う存分発揮された姿が描かれているが、その中でも先陣攻撃死・白兵死・単独反撃死を中心としては、武家の統治体系としての死の論理が上下に分けられて、兵士は死も恐れない精神、武将は勝利のための謀を巡らす能力が重視されている。そして武将と侍の自害と壊滅的な死の叙述には、宮方に特別な配慮が施された形の類型性が発見できるが、これには皇統の権威を表そうとする意図が込められているものと考えられる。

次は戦場死の瞬間、本人の宗教的行為が叙述されている場面である。

『太平記』の戦場での最後の時、念仏を唱えた武士が何人かいる。和田備後守範長が奮戦の後「今は遁るべしとも覚えねば」と覚悟した瞬間、「辻堂の中へ走り入り、本尊に向ひ手を合はせ、念仏高声に二、三百返が程唱へて、腹一文字に掻き切」（巻十六　備中の福山合戦の事）ったという叙述、「楠が一族十三人、手の者六十余人」が「六間の客殿に二行に並み居て、念仏十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切」（巻十六　正成兄弟討死の事）ったという叙述があるが、『太平記』の作者はこれに対し何の評価もしていない。しかし楠正成の場合、配下の者の念仏を聞きながら「最後の一念に依って、善悪の生を引

く」という信仰を認めた上で、「七生までただ同じ人間に生れて、朝敵を滅ぼさばや」という「罪業深き悪念」を示す。そのような正成を『太平記』の叙述者は、「智・仁・勇の三徳を兼ねて、死を善道に守るは、いにしへより今に至るまで、正成ほどの者はいまだ無かりつるに」云々と絶賛している。これは後醍醐天皇への忠誠心・武勇の精神を宗教よりも高く評価した事によるものと判断される。一方、北条一門の敗北の時、妻子を同伴して自害した例が二例ある。その内、淡河右京亮時治一家の場合は、母上の教えにしたがって、「二人のをさなき人々、母と共に手をあはせ、念仏高らかに唱へて」（巻十一　越前の牛原地頭自害の事）入水し、「その後時治も自害」しているが、叙述者はこれに対し、「一念五百生・繋念無量劫の業なれば、奈利八方の底までも、同じ思ひの炎となつて焦がれたまふらんと、哀れなりける事どもなり」と夫婦間の愛執をあげて堕地獄を設定し、罪悪と判断している。最後の念仏をまったく認めなかったという面で『平家物語』と大きな差異を見せている。夫婦同伴の自害の時に念仏も唱えなかった越中の守護名越時有一族には、「夫婦執着の妄念」（巻十一　越中の守護自害の事付怨霊の事）のため「幽魂・亡霊」となって現れた事を叙述し、「まのあたりかかる事の、うつつに見えたりける、妄念の程こそ罪深けれ」と悪評している。これらの人々の評価を根拠にして、戦場では、念仏よりは武勇の精神が優先して、武勇を守ってからの念仏は構わないが、武士道精神に違反してからの念仏は往生に効果もなく、ただ悪評だけされている事がわかる。

しかし逆修は好意的で、賞賛的に描かれている。塩田陸奥入道道祐の場合は「先立ちぬる子息の菩提をも祈り、我が逆修にも備へんとや思はれけん、子息の尸骸に向つて、年来読みたまひける持経の紐を解き、要文所々打ち上げ、心しづかに読誦し」（二　116）て、切腹したとあるが、念仏よりも法華経信仰が重視されていたその頃の理想型を現しているとも見られる。本格的な逆修の例としては、楠正成の子息の楠正行・弟正時以下一族の場合である。「今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御

廟に参つて、…如意輪堂の壁板におのおの名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、「返らじとかねて思へば梓弓なき数にいる名をぞとどむる」と一首の歌を書き留め、逆修のためとおぼしくて、おのおの鬢髪を切つて仏殿に投げ入れ」（巻二十六　正行吉野へ参る事）て戦場に臨み、奮闘の果てには「今はこれまでぞ。敵の手に懸かるな」とて、自害に至っている。また先陣攻撃死でも紹介した人物であるが、本間九郎資貞の嫡子の源内兵衛資忠が、父親の葬礼の時、「先づ上宮太子の御前に参り、「…父にて候ふ者の討死つかまつり候ひし戦場の、同じ苔の下に埋もれて、九品安養の同じうてなに生るる身となさせたまへ」と、泣く泣く祈念をこらし」てから、その場で「城中へかけ入つて、」壮烈な死を遂げる。これに対し叙述者は、「惜しいかな、…忠孝の勇士にて、家のために栄名あり」云々と激賛している。これらの人々の叙述は、いずれも宗教よりも死も辞さない武勇の精神が重視されていることを窺わせるが、それは戦闘を前にして神前で死を誓って、武勇を思う存分発揮しながら死んでいくのが武士の死に方として受け止められていたためと判断される。このように戦場ではあくまでも武勇が優先していることが分かる。

Ⅲ．非戦場死の様相と論理

次は、処刑とか病死等の非戦場死の場面で、まず臨終の瞬間の死者の宗教的行為は叙述されていない場合である。

これにはまず足利尊氏、義詮等、勝利者側の自然死の場合がある。念仏行儀をしたとか、現世的な遺言を残したという最後の描写はしていない。病状、死去の事実を記してから、「悲しいかな、天下を治めて六十余州、命に従ふ者多しといへども、有為の境を辞するには、伴うて行く人も無し」（巻三十三　将軍御逝去の事）等と諸行無常、盛者必衰を吐露して、誰でも仏法信仰に帰依すべき必然性を説法すると共に、手厚い葬儀を叙述している。

処刑の場合は、念仏を唱える程の暇も持ち得ずに突然処刑されてしまう状況を客観描写することによって、不慮の死であることを現し、恨みを暗示してい

る。「平宰相成輔をば河越三河入道円重具足したてまつて、これも鎌倉へと聞えしが、鎌倉までも下し着けたてまつらで、相模の早川尻にて失ひたてまつる」（巻四　159頁）、「文衡入道をば、結城判官に預けられ、夜昼三日まで、上げつ下しつ嗷問せられけるに、残る所無く白状しければ、すなはち六条河原へ引き出だして、首を刎ねられけり」（巻十三　北山殿謀叛の事）等の叙述には敗北者を往生に至らせようとする意図すら見られない。その上、公宗の場合は出雲への流罪が決定し、「輿の簾をかかげて乗らんとしたまひける時、貞平朝臣、長年に向つて、「早」と言はれけるを、殺したてまつれとの言葉ぞと心得て、長年、大納言殿に走り懸かつて、鬢の髪を掴んでうつぶしに引き伏せ、腰の刀を抜いて、御首を掻き落し」（上同）たという、過失で酷い死に至る状況が活写されている。また、北条の滅亡時、「むねとの平氏十三人、ならびに　…二階堂出羽入道道蘊以下、関東権勢の侍五十余人、般若寺にして各入道出家して、律僧の形に成り、…降人に成つて」（巻十一　179頁）出た事に対して、「遁れぬ命を捨てかねて、縲紲面縛の有様、前代未聞の恥辱なり」云々と悪評して、ついに「皆黒衣を脱がせ法名を元の名に改めて、一人づつ大名に預け、…かれこれ十五人、阿弥陀峰にて誅せられ」たというあっけない死を描きながらも、「面々の尸骸、便宜の寺々に送られ、後世菩提をぞとぶら」ったと記し、死後供養は重視されている状況を叙述している。

このような残酷な状況は諸武将の妻子等、女人の死の叙述からも窺える。即ち、一宮の死去の後「見るにつけ聞くに従ふ御歎き、日毎に深く成り行きければ、やがて御息所も御心地煩ひて、御中陰の日数いまだ終へざる先にはかなく成」（巻十八　春宮還御の事付一宮御息所の事）ったとある一宮御息所、そして「形見の小袖を引きかづき、その刀を胸につき立てて、忽ちに、はかなくな」（巻十一　金剛山の寄手等誅せらるる事付佐助貞俊が事）ったとある佐介左京亮貞俊の女房の場合も最期の念仏は叙述されていない。それに、諸武将の妻室が「いやしくも二夫に嫁せん事を悲しみて、深き淵瀬に身を投げ、あるいは口養のたすけ無くして、子におくれたる老母は、わづかに一日の餐を求めかねて

みづから溝壑に倒れ伏す」（上同）との叙述とか、「「あな哀れや、道路に袖をひろげ、食を乞ひし女房の倒れて死せしはたれが母なり。短褐に貌をやつしてゆかりを尋ねし旅人の、捕られて死せしはたれが親なり」とほのかに語るを聞く時は、今まで生きけるわが身の命を、憂しとぞ更にかこたれける。」（上同）という叙述は、家族の供養もできない惨めな環境、残酷な死である事を強調する形となっている。『平家物語』の女人達が供養を担当する役割、あるいは往生人として描かれているのと大きな差異を見せている。

神罰からの祟りを受け、直ちに死に至る姿も写実的に描かれている。北条武臣の斉藤太郎左衛門利行が、相模入道の前で天子からの告文を読んだとの理由で「にはかに血を吐いて死にたりける」（巻一　48頁）との叙述[11]、「みづから口走つて、「われ崇徳院の御領を落して、軍勢の兵粮料所に当て行ひしによつて重病を受けたり。…あらあつや、堪えがたや、」」（巻三十三　崇徳院の御事）と喚いて死んでいったとある伊予守細川繁氏と家人行吉の例、新田義興を憤死に至らせた江戸遠江守が恩賞地に向かう途中、「義興の怨霊」（巻三十三　新田左兵衛佐義興自害の事）の祟りを受け、「叫び死に」にしたという叙述、自分の手で殺された和田新発意に最期の瞬間、「ちゃうどにら」（巻二十六　楠正行最期の事）まれて、「仰けば和田が怒りたる顔天に見え、俯けば新発意のにらめる眼地に見えて、…湯浅あがき死にぞ」死んだという叙述等があり、足利直義の死についても「いかなる罪の報ひぞと案ずれば、…将軍鎌倉にて偽りて一紙の告文を残されしゆゑにその御罰にて」（巻三十　慧源禅門逝去の事）とか、「大塔宮を殺したてまつり、将軍の宮を毒害したまふ事、この人の御わざなれば、その御憤り深くして、かくのごとく亡びたまふか」と、死の原因を因果と怨霊の祟りと解釈している。因果を探るような叙述としては、相模入道高時の嫡子を敵の手に渡し、首を刎ねさせた五大院右衛門が遂に「道路の崎にして、飢死に」（巻十一　150頁）に至ったとか、宮方に降伏した長門の探題時直が「幾程もあらざるに、病の霧に侵されて、夕べの露と消え」（巻十一　長門の探題降参の事）たという叙述は、侍の寝返りとか降伏は結局神罰からの死

に至るとの論理を語っている。ここで特に注目されるのは、このように神罰と規定される死の事例は、すべて北条軍と足利軍の武士だけで、宮方の武士は一人も出ていないことである。ただ一カ所、後醍醐天皇の中宮禧子・春宮の崩御について「亡卒の怨霊どもの所為なるべしとて、その怨害を止め、善所に赴かしめんがために、…法勝寺にてすなはち供養を遂げ」（巻十二　公家一統政道の事）たという叙述は出ているが、武士としては宮方の人物は一人も出ていない。何よりも怨霊譚によると、足利幕府の僧の妙吉侍者の奢りと没落、家臣の上杉伊豆守重能・畠山大蔵少輔・高武蔵守師直・高越後守師泰の謀叛と死、そして足利尊氏と直義の兄弟の不和、直義の子息の死、家臣の仁木右京大夫義長・細川相模守清氏・畠山入道・舎弟尾張守の謀叛と死等も皆、後醍醐天皇を始めとする宮方の怨霊軍団の策略によるものと記されている。

このような特徴は、事故死においても確認できる。四条河原の田楽の桟敷が倒壊して、「そこばくの大物ども落ち重なりけるあひだ、打ち殺さるる者その数を知らず」（巻二十七　田楽の事付長講見物の事）とある大惨死について、「これただ事にあらず。いかさま天狗の所行にこそあらめ、」と解釈するが、さらにまた「惣じて天狗の態ばかりにもあらず。…見物の者といふは、洛中の地下人・商買のともがらどもなり。それに日本一州を治めたまふ貴人たち交はり雑居したまへば、正八幡大菩薩・春日大明神・山王権現の怒りを含ませたまふによつて、この地をいただきたまふ堅牢地神驚きたまふあひだ、その勢ひに応じて皆崩れたるなり」（巻二十七　雲景未来記の事）と究明して、あくまで神仏思想による国家の秩序を主張している。また北条残党の出陣の際、「大仏殿の棟梁、微塵に折れて倒れけるあひだ、その内に集まり居たる軍兵ども五百余人、一人も残らず圧にうてて死に」至ったことを叙述して、「戦場に赴く門出に、かかる天災に逢ふ。この軍はかばかしからじ」（巻十三　足利殿東国下向の事付時行滅亡の事）と心配した通り、北条残党は敗れてしまう。このような事故死にも宮方の武士の事例は出ていない。

次は非戦場死の場面に、宗教的行為が叙述されている場合である。

まず念仏の人物としては、「敷皮の上に居直つて、一首の歌を詠じ、十念高らかに唱へて、しづかに首をぞ打たせける」（巻十一　184頁）と叙述されている佐介貞俊、そして「三条殿から調進せられて候ふ」薬を毒と知りつつ、「悪念に犯されんよりも、命を鴆毒のために縮めて、後生善所の望みを達せん」（巻十九　金崎の春宮ならびに将軍の宮御隠れの事）と、「毎日法華経一部あそばされ、念仏唱へさせたまひて、この鴆毒をぞきこめしける。…御終焉の儀しづかにして、四月十三日の暮程に、忽ちに隠れさせたまひけり」とある東宮の例がいる。念仏の人物が二人だけという事実は、非戦場死の殆どの人物が念仏を唱えている『平家物語』の雰囲気とは大きな差異を感じさせている。数だけで無く、念仏行為を尊ぶような叙述は見られず、毒殺とか処刑の場であっても自ら死を迎えようとする精神を強調しているのが特徴である。

また自らこの世への執着を断ち切るような禅的な辞世の頌を書き残して処刑されたとある人物もいる。「少しも臆したる気色もなく、敷皮の上に居直つて、辞世の頌を書きたまふ。五蘊仮成形　四大今帰空　将首当白刃　截断一陣風　年号月日の下に、名字を書き付けて、筆をさしおきたまへば、斬手後へ回るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、むくろはなほ坐せるが如し」（巻二　長崎新左衛門尉意見の事付阿新殿の事）と記されている中納言資朝、そして類似表現で描写されている右少弁俊基（巻二　俊基誅せらるる事ならびに助光が事）、源中納言具行（巻四　笠置の囚人死罪流刑の事付藤房卿の事）の場合である。このような姿は禅宗の時代の理想形の姿として描かれているとも見られるが、問題は後醍醐天皇の近臣であるこれらの人々の内、俊基・資朝は天狗姿の怨霊となって現れてくる事である。執着と妄念を断ち切ったというのに怨霊となったというのはどうもおかしいが、このような姿は、小松茂人氏も指摘されたように、「阿弥陀仏に頼る他力信仰ではなく、自力の絶対的な確信」[12] と見られ、往生に相応しくないと判断されたことと思われる。

次は、後生善処のための最後の一念を拒否し、現世的な意志を示したことから悪評された人物である。往生には最後の欣求浄土的な一念が必要だという認

識がはっきり示されている箇所として注目される。

まず結城入道の場合、進軍中急病になり最期を迎えた時、善知識の聖が枕に寄って「相構へて後生善所の御望みおこたる事なくして、称名の声の内に、三尊の来迎を御待ち候ふべし」（巻二十　結城入道地獄に堕つる事）と勧めるが、それに対し「つひに朝敵を亡ぼしえずして、むなしく黄泉のたびにおもむきぬる事、多生曠劫までの妄念」となることを訴え、供仏施僧の作善、称名・読経の追賁も拒否し、「ただ朝敵の首」だけを要求しながら「刀を抜いて逆手に持ち、歯噛みをしてぞ死」んでいったと叙述されている。これに対し「罪障深重の人多しといへども、終焉にこれ程の悪相を現ずる事は、古今未聞のところなり」と悪評し、堕地獄譚に繋がっている。結城入道の臨終の描写は、臨終正念だけでなく死後供養を否定する遺言、これに対する作者の非難、堕地獄の設定等が『平家物語』の清盛の死の場面とあまりにも似ていることから、「影響があることは否定し得ない」[13] と、小松茂人氏等も評価されている。『平家物語』『太平記』ともに、戦場では殆どの武士達が来世の安楽を拒否し、現世的な武勇と忠誠を発揮しながら死んでいき、それが賞賛的に描かれているにもかかわらず、この二人だけが否定的に捉えられているのは、非戦場死は戦場死の論理とは違うということを現しているのではないだろうか。この面でこの二作品の死の論理は繋がっていることが確認できるが、『太平記』の結城入道の場合は「妻子どもに、一日、経を書き供養して、この苦患を救ひ候へと仰せられ候へ」と教える「六道能化の地蔵薩埵」の説法を叙述して、地獄に落ちた後でも家族の供養で救済に至るとの論理となっているわけで、『平家物語』よりも死後の供養がもっと露骨に強調された形となっている。

しかし『太平記』が敗北者の往生を描いた『平家物語』と大きな差異を見せるのは、後醍醐天皇に従う近臣と武将達が死後、怨霊と成って足利家の内紛を画策するとの構造につながっている事である。後醍醐天皇の臨終に際して「大塔の忠雲僧正御枕に近付きたてまつて、…「最後の一念によつて、三界に生を引くと、経文に説かれて候へば、…後生善所の御望みをのみ、叡心に懸けられ

候ふべし。」と申された」（巻二十一　先帝崩御の事）のに対し、「ただ生々世々の妄念ともなるべきは、朝敵をことごとく滅ぼして、四海を太平ならしめんと思ふばかりなり。…これを思ふゆゑに玉骨はたとひ南山の苔に埋もるとも、魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ。…」と委細に綸言を残されて、左の御手に法華経の五の巻を持たせたまひ、右の御手には御剣を按じて、八月十六日の丑の刻に、つひに崩御成りにけり」と叙述されている。

後醍醐天皇も結城入道も、臨終に際して後生善所の望みを退け、現世的な執念を残したという面で変わりはないが、結城入道は十悪五逆の罪人とされて墮地獄が設定されているのに対し、後醍醐天皇は怨霊化されている。この差異は何を意味するのか、というのが問題といえよう。差異があれば、結城入道の場合は、臨終正念だけでなく死後供養をも否定している。即ち、『平家物語』では清盛、『太平記』では結城入道だけが死後供養を否定する遺言が提示されており、『太平記』の場合は、地獄から逃れる道も死後供養として提示されているわけで、臨終正念よりも死後供養が重視されていることが注目される。

後醍醐天皇の怨霊化には、その背景を探るのに参考になる文章を提示する。

①「第一の御子天照大神、この国の主と成つて、伊勢国御裳濯川のほとり、神瀬下津岩根に跡を垂れたまふ。ある時は垂迹の仏と成つて、番々出世の化儀をととのへ、ある時は本地の神に帰つて、塵々殺土の利生をなしたまふ。これすなはち迹高本下の成道なり。ここに第六天の魔王集まつて、この国の仏法弘まらば魔障弱くしてその力を失ふべしとて、かの応化利生を妨げんとす。時に天照大神、かれが障碍をやめんために、われ三宝に近付かじといふ誓ひをぞなしたまひける。これに依つて第六天の魔王怒りをやめて五体より血をあやし、「尽未来際に至るまで、天照大神の苗裔たらん人を以つてこの国の主とすべし。もし王命に違ふ者有つて国を乱り民を苦しめば、十万八千の眷属朝にかけり夕べに来たつて、その罰を行ひその命を奪ふべし」と固く誓約を書いて天照大神に奉る。今の神璽の異説これなり。まことに内外の宮のありさま、自余の社壇に

は事変はつて、錦帳に本地を顕せる鏡をも懸けず、念仏・読経の声を留めて僧尼の参詣を許されず。これしかしながら当社の神約を違へずして、化属結縁の方便を下に秘せるものなるべし」[14)]

（巻十六　日本朝敵の事）

②「仏法わが国に伝はつて七百余歳、皇統を祝し蒼生を益す者、法相・円頓の秘蹟もつともすぐれたり。神明権跡を垂れて七千余座、宝祚を鎮め威光を輝かすは、四所・三聖の霊験他に異なり。…しかつしよりこのかた南部・北嶺ともに護国護王の精祈を掌れり。天台・法相互ひに権教・実教の奥旨を究む。まことにこれ仏法を以つて王法を守るの濫觴、王法を以つて仏法を弘むるの根源なり。」（巻十七　山門の牒南部に送る事）

③「先朝は元来摩醯修羅王の所変にておはすれば、今還つて欲界の六天に御座あり。相従ひたてまつる人々は、ことごとく修羅の眷属と成つて、ある時は天帝と戦ひ、ある時は人間に下つて、瞋恚強盛の人の心に入り替はる。」（巻二十三　大森彦七が事）

④「飢饉・疫癘、盗賊・兵乱止む時無し。これまつたく天の災ひを降すにあらず。ただ国の政無きによるものなり。…吉野の先帝崩御の時、様々の悪相を現じ御座候ひけると、その神霊御憤り深くして、国土に災ひを下し、禍ひを成され候ふと存じ候ふ。…かの御菩提を弔ひまゐらせられ候はば、天下などが静まらで候ふべき。」（巻二十四　天龍寺建立事）

⑤「今現ずるところの悪霊どもは、皆修羅の眷族たり。これを静めん謀を案ずるに、大般若経を読むにしくべからず。…」

（巻二十三　大森彦七が事）

①に提示した神璽由来説に、日本国家の秩序体系が語られている。即ち、天照大神が仏法の伝播を妨げようとする第六天魔王を宥めようと、自ら三宝には近づかないという誓いをし、その代わり第六天魔王は日本の朝敵を滅ぼして皇統を永遠に守ってあげるとの誓いをした。これで皇統は永遠に続く半面、三宝には関与できなくなったということであるが、②では三宝は南部・北嶺で守って

こそ鎮護国家になるという王法・仏法相依論が説かれている。そうなると、武家との戦いに敗れて滅んだ後醍醐天皇は結局天照大神の子孫ではなく、③で語られているように第六天魔王の化身だということになるが、④ではこの世の混乱はこの荒ぶる神魔王の最後の悪相によってもたらされたということで、その菩提を弔うことによって天下は静まるという論理につながっていくわけである。『平家物語』でも安徳帝が荒ぶる神、竜神として捉えられて、世の混乱が叙述されているが、建礼門院等の役割で平家は自ら往生に至るとの論理となっている。これに対し、『太平記』では後醍醐天皇の怨霊を強調することによって、その鎮魂を担当する仏教の位置がもっと強調された形となっているのである。一方、武家との対決に敗れて滅んだ後醍醐天皇は正統の皇統ではなかったという説をつけ加えることによって、中世神話の秩序回復に励んでいることと考えられる。そのような論理で失墜した王法の権威を回復し、王法の健在を証明しようとしたものと見受けられる。

以上、非戦場死の様相をまとめてみると、念仏・禅の信仰の臨終行儀をして、最期を遂げている人物が何人かいるが、宗教的行為よりは死も怖がらない精神が強調されている。その他は後世善所のための最期の一念を拒否するか、それともそのような一念も持ち得ない極限的な惨めな状況下の死が活写されている。結城入道、後醍醐天皇の臨終の場面で、往生には後世善所の望みが必要だという認識は堅持されているわけで、このような死は皆成仏できない死であることをほのめかしているものと言えよう。本格的な鎮魂儀礼が要請されるという論理の叙述である。

Ⅳ. 結び

以上、『太平記』の死の様相と論理をまとめてみると、戦場では武勇、非戦場では欣求浄土的な一念が要求され、場によって規定される死の論理は『平家物語』に続いて『太平記』にも見られる。しかし『太平記』には戦場・非戦場ともに武士の世がもたらした極限的な状況下で迎える不慮の死、怨念の死が多

く叙述されている。このように『太平記』の死の叙述に類型的な特徴が見られるのは、武家指導者の指導理念と、王法・仏法相依論を顕わすための意図が『太平記』のテーマとして設定され、記述の段階において構想と叙述を規定していったものが大きいと考えられる。即ち、基本的には武家の世を認めながらも、新しく権力を握って群雄割拠する武士階級に後醍醐天皇の怨霊を認識させることによって、その鎮魂を担当する仏教界の役割を強調し、国家の秩序体系として君臨してきた「王法・仏法」の存続を図ろうとしたものと考えられる。そのような意図で、自ら往生に至っていく姿よりは、怨霊化されていく模様を浮き彫りにし、厳かな仏事供養が重視されるような形となったものと見受けられる。表現においても浄土真宗で掲げている阿弥陀仏の本願他力信仰という用語は見られず、せいぜい「後世善所の望み」という表現が使われていて、浄土真宗を認めなかった顕密仏教の精神が現れているものと考えられる。

注

1) 「『平家物語』を構造する「無常観的宗教性」対「英雄主義的歴史性」、その他様々認めざるを得ぬ二律性の背反は深く論議される永遠の課題といえるのである」(水原一氏)『日本古典文学大辞典』五巻　396頁)

2) 拙稿「『平家物語』の死の様相と論理」『軍記と語り物』三十号　1994.3

3) 永積安明氏　「太平記論」『文学』1956.9

4) 山口昌男氏・中沢新一氏「対談　『太平記』の世界」『国文学』1991.2

5) 山下宏明氏「『太平記』に見る死の諸相」『国文学解釈と鑑賞』1991.8

6) 兵藤裕己氏「太平記の＜言葉＞の構造」『日本文学』1982.1

7) その他の先陣攻撃死の人物としては、河野対馬守の猶子七郎道遠(巻九　43頁)、長崎二郎高重に殺された横山太郎重真(巻十　135頁)、「面に進みたる児八人」(巻十四　339頁)、「一陣に進んで戦ひける久下弥三郎が舎弟五郎長重」(巻十四　364頁)、「菊地が兵」(巻十六　23頁)、「京勢の中秋山弥次郎・大草三郎左衛門」(巻二十六　161頁)、「一番に懸け寄せける南次郎左衛門尉、…二番に劣らじと懸け入りける松田次郎左衛門」(巻二十六　167頁)、「近江国の住人江見勘解由左衛門尉・箕浦四郎左衛門・馬淵新左衛門」(巻三十二　62頁)、「後藤三郎左衛門以下、面に立つ程の兵五十余人」(上同　63頁)、「一番に進んで戦ひける四国勢の中に、秋間兵庫助兄弟三人・生稲四郎左衛門一族十二人、…備前国の住人須々木三郎左衛門父子・兄弟六人」(上同　64頁)等の例が挙げられる。

8) 集団戦については、松尾葦江氏が、形式と類例をまとめられている。(大体、一番に○○、二番に○○、…N番に○○という形式で進められる。)松尾葦江氏「太平記の意志」『太平記とその周辺』新典社　1994.4

9) 上杉伊豆守が「八木光勝が中間どもに生捕られて刺し殺され」たことに対し、「ただ最後の死にざまをこそ執する事なるに、きたなくも見えたまひつる死に場かな」(巻二十七 226-7頁)と、恥知らずな人間として厳しく非難している。格闘の末、殺害された大塔宮の場合は、「食ひ切らせたまひかりつる刀の、いまだ御口のなかに留まつて、御眼なほ生きたる人の如し」(巻十三 290頁)という姿を千将莫耶の説話を踏まえて描き、死後までの敵討ちの精神、恨みを表している。「朱をそそぎたるごとくなる大の目を見開いて、…ちやうどにらむ」(巻二十六 167頁)とある和田新発意の恨みは、自分を殺した湯浅本宮をついに「あがき死に」に至らせている。

10) 拙稿「『太平記』の死の諸相－北条軍団の滅亡を巡って」
『国文目白』三十三号 1994.1

11) 山下宏明氏は、「利行は『常楽記』によれば嘉暦元年(1326)の死去で、前に六波羅奉公とあったので地理的にも合わない」と分析され、「史実ではあるまい」と断定されている。
「新潮日本古典集成」『太平記』」－ 47頁 注二

12) 小松成人氏「『太平記』における死」『中世軍記物の研究』桜楓社 1962.1

13) 前掲書 98頁

14) ①の記事は、古態と見られる天正本神田本等には載っていない。

討論要旨

ニールス・ギュルベルク氏から、神罰や怨霊による死は宗教的なものと考えられるので、「非戦場死で宗教的叙述のない場合」に入れるより「非戦場死で宗教的叙述のある場合」に分類する方がよいのではないか、との意見が出された。発表者は「宗教的叙述というのは、最期の瞬間のことだけにしぼった。日本では、最期の一念、つまり最期の瞬間に念仏を唱えることによって往生するという信仰があったと思われるので、それだけにしぼって宗教の要素を考えてみた。『臨終正念』という言葉を使うことも考えたが、『平家物語』とくらべ『太平記』では、この言葉があまり使われなくなっているので、あえて『宗教』という言葉を用いた」と述べられた。また、佐伯眞一氏より、当時の通念というものが『太平記』にどう反映されているのか、『太平記』に制作意図というものがあるとすれば、それをどう考えるか、といった点について発言があった。